

# カナータイプの自閉症との40年間の 精神分析的な心理療法から学んだこと

乾 吉佑<sup>1</sup>

## Forty years psychoanalytical psychotherapy on Kanner's syndrome

Yoshisuke Inui<sup>1</sup>

**Abstract**：本論考は、日本心理臨床学会大会での学会賞受賞講演を基に作成されたものである。本邦でも自閉症児（者）との長期的な心理療法は経験されているであろうが、未だカナータイプの自閉症との40年間の治療経過の報告は見られていない。40年間の治療経過のまとめと、そこから学んだことを取り挙げ、臨床心理学専攻の若き後輩の臨床活動に益するものとなることを願って報告する。

**Keywords**：カナータイプ自閉症、自閉症の精神分析的な心理療法、40年間の自閉症治療

### I. はじめに

本論考は、第30回日本心理臨床学会福岡大会（平成23年9月2日）での学会賞受賞講演を基に作成されたものである。人間科学論集心理学篇に掲載を同編集委員会より許されたのでここに報告する。

自閉症児（者）との長期的な心理療法は、本邦でも経験されているであろうが、この度報告するカナータイプの自閉症との40年間の治療経過の報告は未だ本邦でも見られていない。場が与えられたので、40年間の治療経過のまとめと、そこから学んだことを取り挙げ、臨床心理学専攻の若き後輩に益するものとなることを願って報告する。

筆者の40年以上の心理臨床家としての歴史の多くは、クライアントとの関わりから紡ぎ生みだされたものである。中でも、筆者の臨床家としての姿勢やあり方に有形無形に大きな支えとなり、この度の学会賞の礎を作った方が、今なお一緒に歩み続けている自閉症のS.F.さん49歳である。

改めてS.F.との事例経過を振り返り、共に歩んだ過程とそこから学んだ課題について感謝とお礼を込めて報告したい。S.F.についての心理療法の途中経過の一部は、すでに、日本精神分析学会の1987年と2005年の学術総会で2度報告している。また2009年の著書「思春期・青年期の精神分析的アプローチ」（遠見書房）の中でも出会いから20年間の経過を取り上げている。今回は事例の詳細な検討が目的ではないので、ほぼ40年間を駆け足で述べ、その心理療法から学んだ事柄を、学会賞講演と

して後輩と共有したい。

### II. 初診時のS.F

初診時のS.F.は仮死で出生した。身体発育は順調だったが、人見知り強く笑いも硬かった。言葉は1歳から認めたとのことだが会話には発展せず、単語のやり取りが主であった。遊びもマッチ棒や一枚のカルタに固執。他児への関心は著しく乏しい。1歳半保健所等に相談、過保護と指摘されたようである。3～4歳は幾何学模様やブルドーザーを何時間でも書いていたという。3歳10カ月で弟が出生したが、まったく無関心だった。4歳時幼稚園に入園したがまったく馴染めず、超ウルトラお客様で数カ月で退園となった。再度児童相談所や児童精神科の専門医をめぐり自閉症の兆候と指摘され、一時薬物処方を受けたとのことである。

筆者が所属していた大学病院精神神経科への初診は5歳児の時だった。児童精神科専門医の初診で「カナータイプの小児自閉症」と診断された。

#### 《当時の問題点》

当時の問題点は、無表情で空間を見ている。他者に関心まったくない。常同の一人遊び。奇声や奇行そして独語が見られていた。奇行というのは、たとえば、3時間も唾を吐き続けバスタオルを1時間でぐしょぐしょにして、何枚も交替するものであった。白墨・砂・石灰などを口に入れたり、時には飲み込むこともあり周囲が何度も大慌てすることがあった。寝転び、はめ板を数時間も蹴り続け注意しても気が済むまでやり続ける感じだった。その一方、自動車、ブルドーザーをあっという間に書きあげる面も認められていた。このように4～5歳にかけてのS.F.は、対人関係障害を初めとする重度の多

彩な自閉症症状を呈していた。

### Ⅲ. S.F との面接経過

S.F との面接経過は、表1の通りである。

#### A) 筆者の担当までの面接経過

筆者が担当するまでの面接経過は、5歳から11歳までの約6年間であった。初診の児童精神科医の重症だが、「コトバがあるから治療してみよう」で開始したとのことである。もちろん、コトバと言っても……コマーシャルの鸚鵡返しや“行っちゃった”“切れちゃった”“ルラルララー”などの脈絡のないコトバが投げ出される程度で、あとはキー、キーという奇声であったという。

当時、プレイルームで毎週45分程度関わっていたが、当初はプレイルーム内で落ち着けず、ほとんど外に出て勝手に病院内を歩き回ることが多かったという。また、たまにプレイルーム内に居る時は異常行動が多く、遊びもちり紙を短冊のように細かく千切る、一枚の紙をひらひらとそよがせてじっと見つめている、水道のシンク内に水を出したり止めたり、あるいはシンク内に貯めた水が勢よく下水道に吸い込まれる様子を面接時間中無言でやり続ける、一掴みした砂場の砂を何度も落とし続けるなどであった。約6年間は、児童グループの女性心理臨床家3人が交代で関わり、面接はプレイルームで遊べることを心がけたことと母親への支持であったという。小学校は2年猶予後に8歳で入学した。小学校でも「超ウルトラお客様」で動き回り授業にならず、校庭で一人遊びをしていることがほとんどだったという。

筆者が担当した小学4年時（11歳）は、特別支援学級におり、相変わらず落ち着かず奇行も続いていた。しかし、教えないのに漢字は読み書き、簡単な計算を手足で出来るなど知的障害とは明らかに違っていた（担任談）。一方家では、一人で虫取りか、祖父のはしご作りの手伝い。母とも一部コトバを交わすのみだった。筆者との面接開始時の彼は、4～5歳に比べ無表情さは幾分消え、奇妙な行動はやや減少し、日常生活の行動範囲は狭く限局されてはいた。しかし、マイペースだが集団内に居られるようになっていた。

#### B) 筆者との面接経過（11歳～49歳）38年

筆者との面接経過は、11歳から現在49歳の38年間である。面接経過を表2の5期に分け報告する。これはS.Fとの相互確認によって5期に分けたものではなく、筆者の一方的な関わりと読み取りから分けたものである。こ

表1 心理面接経過

児童グループでの面接（5歳～11歳6年）

私との面接（38年間）

- I 期. かかわり模索の時期（11歳～15歳4年）
- II 期. 安定した体験の共有（15歳～22歳7年）
- III 期. 分化と自律への兆し（22歳～32歳10年）
- IV 期. 自律への試み（32歳～41歳10年）
- V 期. 自立をめざして（41歳～49歳9年）

表2 私との面接過程（38年間）

- 1 期. かかわり模索の時期（11歳～15歳4年）
- 2 期. 安定した体験の共有（15歳～22歳7年）
- 3 期. 分化と自律への兆し（22歳～32歳10年）
- 4 期. 自律への試み（32歳～41歳10年）
- 5 期. 自立をめざして（41歳～49歳9年）

の筆者の推論を今でも勇気づけてくれるのは、極めてわずかで微妙な面接内外での彼の示す言動の変化だけである。

#### 第1期. かかわりの模索の時期（11歳から15歳）

この時期、筆者が心がけていたのは以下の2点だった。

- ① 第1は、彼の“トンチンカンなコトバや行為にも、かならず意味と意図があり”かつ、“面接関係に反映されている”という想い（認識）で関わろうと心がけたこと。

そのように心がけてはいたが、いざスタートとして関わってみると、まっ暗闇の中に道をつけるような困難の連続で、投げ出したくなるものだった。

- ② 第2は“Fちゃん\*に関する現実問題は、どんな事でも彼を排除せず彼に明確に知らせることが必要”と決めたことである。これは、後述する21回の出来事から学んだことである。

\*クライアントへの呼び名だが、面接が開始された小学生の時にはFちゃん、中学生からF君ないしS君、20歳からはSさんと苗字で呼んでいる。

以上の2つの関わりの理解は、以下に述べる面接経過から得られたものであった。

筆者の交替などまったく気にせず、それまでの遊びを黙々と開始し続けていた。「遊び」とは、図1の短冊やクッキーと本人と前治療者から呼ばれていたものを、1回50分の面接で2～3個作るものだった。画用紙を切り、クレパスをぼきぼき折りながら、無言で力一杯塗り込める様子は菓子職人さながらで、筆者は寒々とした作

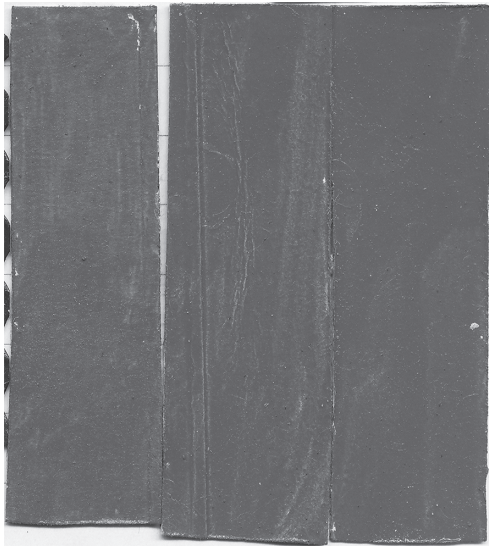


図1 短冊

職場での見学者の気分を味わっていた。そして、面接終了時も手際よく片付けそっぽを向いて帰っていくのだった。

筆者は無視し取り合わないFちゃんに、欲求不満と共に興味を抱き、何故こんな感情を筆者に感じさせるのか知りたいと強く思った。

#### ●面接方針のある試み（3カ月目）

そこで3カ月目の6回に、面接方針を見出したいと以下の試みを行った。① 黙って同じ菓子作りをする。② コトバで“さあーFちゃんと同じ菓子を作ろうかな”。③ 菓子作りを見ながら歌うなどである。

これに対してFは①は無視したが、②、③は“Fちゃん切れるから、切れるから”とか“先生、先生、先生”とこの試みを停止させようとした。

この試みから筆者は、あくまでFの“遊びを保証する設定の一部”あるいは“道具”であって、筆者が“人”として近付くことを阻まれていると感じた。そして、Fは人を遠ざけるために沈黙、無視、トンチンカンな対応や奇声で、取り合わずはぐらかす防衛的態度を取っているのではないかと考えていた。Fとの関わりは、情緒交流の困難ひいては対象関係の障害に焦点を絞った接近の必要性を考えた。

遊びの内容や取り合わない態度に、意味を読み取り意味をつけることから開始した。つまり、筆者を無視し懸命に菓子作りをする彼に“誰を塗り込めちゃうのかな”などと独り言のように呟いていった。もちろん、ほとんどは無視されるか時に奇声で阻まれていた。ところが、そのような呟きを時折続けてゆくと、微妙な「変化」となんと「自発的な」提案が出てきたのである。それは、

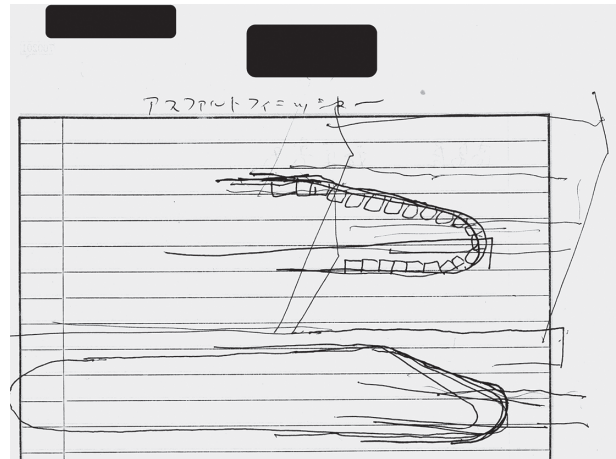


図2

13回目にそれまでの菓子作りから唐突に、図2のアスファルトフィニッシャーと変化し、また、8カ月目（15回）には、Fは菓子作りで下を向いたまま作成に専念していたと思ったら、突然“勉強だから1回でいいよ”と思ひもかけない言葉があった。筆者は、面接回数の自発的提案と推測してすかさず支持した。それまで2週に1回の面接だったが、以後、現在49歳に至るまで、月1回50分の面接を実施している。

#### ●2年目（21回目）の事件

さらに、21回の前日、突然父が来室された。「数日前、中学進学（普通クラスにするか特殊学級にするか）について、Fも居たりビングで両親と祖母が話していると、突然“ $4 - 3 = 1$ だ。1は僕だ。人間は嫌いだ。3人は出ていけ、僕残る”と喚き散らし、母を殴り自分の手を噛み、頭をぶつける混乱が2日間も続いている。その後も時折自分の頭を壁にぶつける行動が見える。家に置いておけない。どこか施設に入れたい」と訴えられた。

次週の面接で、Fに父面接の内容を正直に伝えた。〈 $4 - 3 = 1$ の意味は、Fを除いて両親と祖母の3人で決めようとしたこと。中学を普通学級か支援学級とするかFに相談しないで悪かったと父が謝っていたこと。中学についてはこれからはFに相談するとお父さんが話していたので心配ないこと〉を伝えた。もちろん応答はなかったが、驚いたことに、その日からぴたりと興奮が止まったと報告され、筆者のコトバがFに入っていると強く実感した。

この一件から、先ほどの“Fに関する現実問題は、彼を排除せず丁寧に知らせること”を筆者として強く心がけることに決めた。

#### ●「沈黙」から「纏まりなく喋る」と変化

その後、沈黙がちなそれまでの面接から、纏まりなく



喋べるようになってきた。喋るというより、脈絡なく口から出すと言ったもので、“行っちゃった。切っちゃった。らららー。亀田のあられ。カルピスは初恋の味です。何であるアイデアル。あっと驚く為五郎……”と菓子作りやアスファルトフニッシャーなどを書きながら、喋るものだった。筆者が口をはさむと沈黙し、待っていると口から飛び出す感じで、機関銃の弾を浴びせられているような圧倒される感じで聞き続けるしかできなかった。

40回（3年目）頃から呼びかけ質問形式が登場した。“先生、先生、先生？”“何なの？”“電線電線電線どこ行くのかな？”“なんでかなー？”が認められ、50回（4年目）“ここに来るの楽しみと思うかい”と唐突に肯定的な発言もみられた。筆者は、大声で機関銃のように喋るFの話しに時折かわわり、対話風のトビラが開いた一瞬に、すかさず話題に意味を重ねるように努めだした。

散発的にしゃべる“オトナになりたくない、オトナの臭いがいや、赤ちゃんになりたい”には、〈オトナになることの不安を〉であった。そしてそれに加えて、彼の年代での第二性徴の身体変化と夢精について十分に説明したことはないまでもない。それに対してFは聞いていないかのように、そっぽを向いてクレーンやクイズウ、ブルトザーなどを夢中に書くだけで反応はみられなかった。

ところが、やがて面接場面や家庭で、初めての体験が認められるようになった。筆者に絵や自分で焼いた一輪ぎしの花瓶を持参し“あげるよ”と差し出す。父との口喧嘩をしたことや、夢を見たことを初めて母に報告したなど母親面接で報告された。この変化を筆者への接近の第一歩と考えるとともに、一方で筆者の介入を以前は遊びに引きこもり、今は機関銃のコトバを浴びせることで防衛していることに気づき、今更ながらFの侵入される恐怖や迫害的不安が巨大であることを痛感もした。

## 第2期. 安定した体験の共有（15歳－22歳 7年）

第2期に入って、筆者はFの一見無意味に投げ出してくるこれらの言動に、大いに興味と関心を持って見守ると共に、それらを“今ここでの面接状況に吐き出された情緒のあらわれ”として、言動を読み取り道筋をつけてゆくように努めた。すると、わずかに対話風なやり取りが可能となりだし、“怒ることも怒られるのも怖い”と感情を動かすことの恐れ of 連想内容が認められ、その気持を保証し続けるときごちなくたどたどしいが会話が

進み、驚くべきことに！怖い夢の報告や処罰などの幼児体験を唐突にふっと口にするのだった。たとえば、“先生怒られたりするの厭だろう。厭だろう。ぼくだって厭だよ。卒業式に怒ってよ。……”“お母さんに怒られたことおぼえているよ。ずーっとずーっと昔のこと”“ぐずぐずいった、変なところでジュース飲んだ、風呂でうんちをした。チンチンどのぐらいと聞いたりした。さんざぶたれたよ”また数回後に唐突に、夢の吐き出し（報告？）があった。“変な夢だ”“訳の分からねえ電車。怖い男と怒った女が乗っていたんだ”“湯河原にいった。ジェットコースター落っこちなくてよかったよ”〈夢怖かったね〉“ビールこぼしてお父さんに散々ぶたれたよ”“昔、足のマッサージでパン、パンパンメロンパンといたり、散々文句をいったら、おばあちゃんにメメメってやられたよー”と語った後は、こちらから質問してもまったく無視したように絵に夢中で沈黙したまま遠く離れていくのだった。

この頃、母が面接について尋ねると、「俺がやっているんだから関係ないよ」と言われびっくり。この子がこんな風なことを言えるなんて、とつても思えなかった」と。そして母親は「何かもっと可能性がありそうだ」という気持ちになってきた。筆者は、16年間Fのことで苦勞し、身も心も疲れ果て、くじけそうになる気持ちを保ち続けていた母が、Fの奇行や問題行動に「目くじらを立てずに、この子を見守ろうとする視点が生まれる」ためにも、この母の期待感とはとても大切だと受け止めた。

以上の出来事を経験するにつれ、筆者はFとは未だ距離を置いた面接関係ながらも、何か共有感が生まれつつあるのを感じ出してもいた。そして現実生活では養護学園の高校に17歳で入学した。

そして、図3の「いぬいビル」を面接場面ではじめて共同で製作することがはじまった。

### ●「いぬいビル」の共同製作時の対話

そして、あるビルを作成中に次の出来事があった。筆者が4カ月後に約1カ月間入院せざるを得ない出来事が生じた。筆者の入院について伝えと、ビル作りの傍ら“先生、先生、何階立てにしようか。どうする、どうする”をくどいほど繰り返す合間に、“ひどい風だ、波が大波か。死んじまうな。心臓停まる”とふっと呟いた。すかさず、〈入院の心配有り難う大丈夫すぐに会えるよ〉と言葉を重ねると、もう一度しつこく何階立てを繰り返した後に、“こんな風に言わなかったから、僕は病気になったのかなー”とぼつりと一言語り、筆者が尋ねようとFのコトバを繰り返し問いかけると、その後はいつ

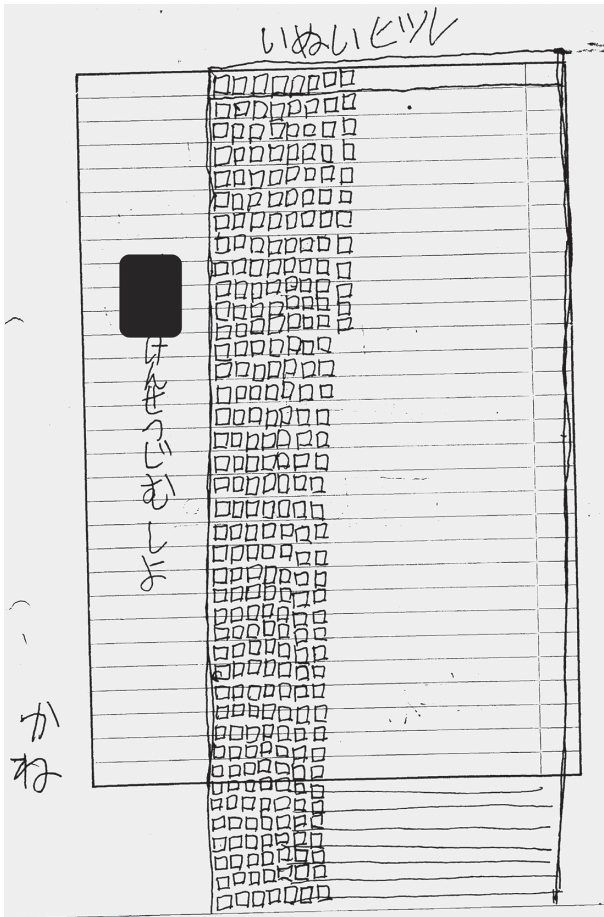


図3

もの“ルラルルラ”や“先生先生電線はどこまで続いているの”“何であるアイデアル”と遠ざかってゆくのだった。

#### ●筆者との共有感と面接場面外の戸惑い

しかし、やがて外界での手に負えない問題点が面接室に持ち込まれるセッションが続いた。たとえば、学校からの職場実習のために派遣された工場で、メッキやシアンなどの毒物を実習として扱うことを聞き不安になったらしく、何度も“ここ（面接室）に毒物はないか大丈夫か”と確かめ繰り返すことがあったり、その一方で、“先生の所から家に帰るといらいらする”と外界への不信感をあらわにしだした。一方、母親面接では「同級生に乱暴する、担任に逆らう、母や弟を叩く」と、この頃困った事が多くなったと報告されるようになってきた。

筆者はこの一連の外界への反発を、むしろ成長し変化する道程（受け止められないことへの怒り、欲求不満の表現）と位置付け介入を行い外界調整を模索した。するとFも“どうしてやると言われても分かんないよ”と戸惑いを語り、“ブルトザーや機械は変わらない”“大きくなるのは大変だ”と漏らした。一方、家庭や学校で

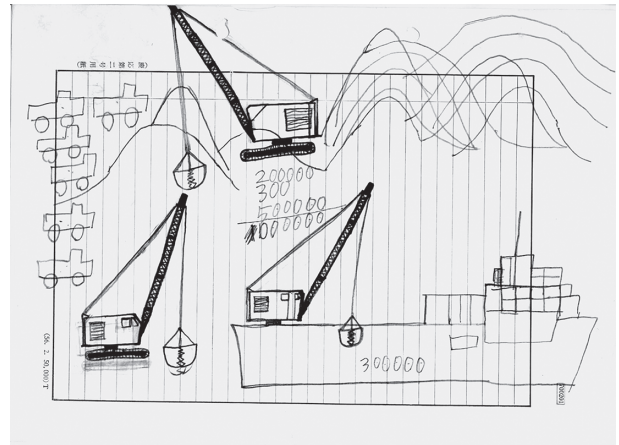


図4

も辛抱強く話を聴くにつれ落ち着きだし、工場の見学・実習にも参加し父親や弟にも気遣いを見せることが多くなる面も認められだした。

この安定の背景には、面接内でのいぬいビルやFビルの建築事務所遊び、砂利運搬遊び、船クレーン遊びなどの彼からの唐突で気まぐれな提案を「遊びの提案」と筆者が位置づけていたことが寄与した面もあったと思われる。それはFが描いた絵を「ごっこ遊び」の道具として筆者から差出すことで、それに次第にFが応じてゆくものであった。当初はぎくしゃくしながらの導入だったが、その遊びの繰り返しの進展も筆者とFとの関係の共有感を深めるには、大きな役割りを占めていたように見えた。

具体的に、船クレーン遊び（図4、図5）で説明する。遊びが導入された当初は、Fがたまたま船を描くと、筆者：〈その船はどんなことをする船ですか？〉と質問。F：“荷物を積む船”筆者：〈どこに行くのかな？〉F：“乾先生のところ”筆者：〈それじゃ、乾先生の会社まで出発しよう〉と絵を動かすものでした。遊びの手順や流れを説明すると、次回からその段取りをなぞるようなごっこ遊び風なやり取りが定着し、Fの方から遊びを筆者に誘う展開となっていくものだった。そして現在は、図4のように、搬送する船を書き、次に、具体的な会社を決める（レンズやスピーカーを作る）。その上で、図5会社に注文を取りにゆき、スライドの注文書と請求書を兼ねた日程・搬入の日取り（製造・建築、トラックの手配、請求書作成など）を決める。何度も注文先との難しい電話による折衝をしたのち、船クレーンが出港するものになっていった。

ごっこ遊びの仕方は拘り強く、当初は遊びが一つのところで止まってしまい動かない時もあった。やがて終始

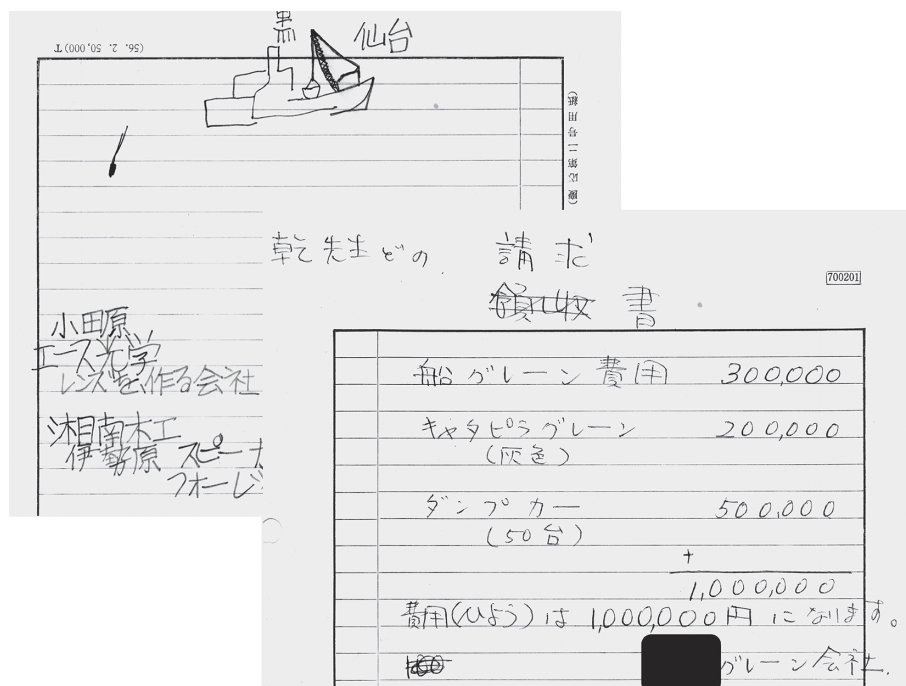


図5 船グリーン遊び

“自分ベース”で遊びをしつこく繰り返すことも認められた。また、厭な交渉になると“タイム”をかけて、自分の話の方向にもって行くなども認められた。このしつこい遊びを「日常生活の厭なことの反復と逆転（受け身的な体験の能動化と受け止め）」のプレイが示されると筆者は了解して対応していた。

そして無事に、養護学園の高校を20歳で卒業し就職（ダンボール製造会社）を決定した。（この時期、就職に当たって、障害者更正相談所での心理検査が学園からの指示で実施された。その所見は以下の結果だった。）

鈴木ビネー検査所見：MA 8歳9カ月 IQ55。

コース立方体組み合わせ検査所見：MA 13歳1カ月 IQ62。

判定所見：対人接触、情緒的対応に違和感あるが、言語による意思疎通にはほとんど支障はない。軽度精神遅滞。一般就労可の方向との検査結果であった。

### 第3期 分化と自律の兆し 10年#121-260 (22歳-32歳)

外界が安定し、職場生活のリズムが形成されるにつれ、外的困難（S\*の1週間の単身入院など）にも対処出来るようになった。筆者との関係も母親面接で「病院から帰ると生き生きみえる。喋り方など先生にそっくり」と同一化も深まりしっかりしたものに見えだした。また初めて寄り道したり、大幅な遅刻や無断欠席も認められた。

\*20歳過ぎてから呼び名はF君からSさんに変更

そのような過程から、次第にSの自己感覚も確かになってゆくように思われた。面接場面に従来の遊びに加えて、拡大された「遊び」が提出されてきた。筆者はこれらを興味深く受け止め、「対象関係の分化と自立の兆し」と意味づけて関わろうと心掛けていた。

たとえば、退社後近くの川で1から2時間ビンや木を「流す遊び」、パチンコ店への出入り、休日に飛行場に向き、飛行機に熱中して6～8時間も飛行場にいること。陶器作りやデパートめぐりなどを面接でも盛んに、「ごっこ遊び風」に筆者に差し出してきた。筆者は川での「もの流し」をFの対象支配の先触れと捉え、それらを興味深く受け止め、たとえば〈Sさんは川の便秘を治す遊びをしているのですね。〉と意味づけ自律感覚を育てたいと考えていた。

これらのSの分化と自律の試みは、決して周囲からは好意を持って受け止められず、「この寒いのに馬鹿なことをして」「いい年して何やっている」と非難されたり、「言うこと聞かない」と無視され非難の対象となりがちで、Sは“皆は横を向いてしまう。だから腹立つことはお腹に畳んでおく”“誰も治してくれない”と不満を強めていった。

次第に、外界での厭な受け身的な経験を面接室内で、これらの遊びの合間に“馬鹿と言われた”などと苛立ちの口吻を込めて語りだしてきた。外での不満やイラダチを“先生は真っすぐ聞いてくれる。いつでも電話しても



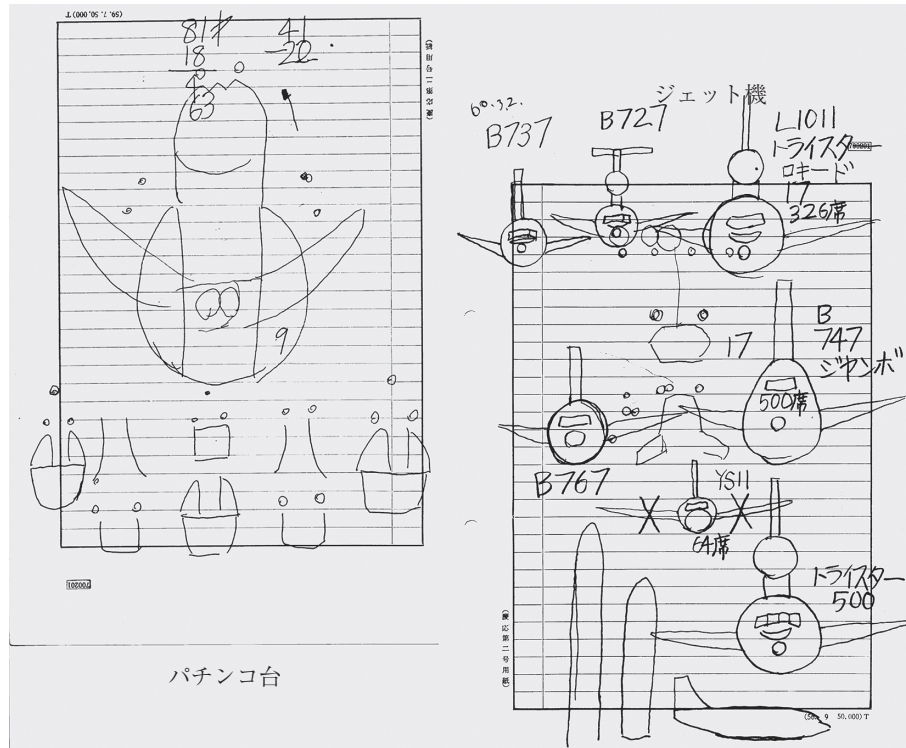


図6

いいね”と保証・確認を求めてきた。また、他方で筆者との遊び、たとえば、図6の飛行機の機種の名前当てクイズ、パチンコの種類や打ち方の中で、“飛行機について全然分からないんだね先生は。この前言ったでしょう。忘れたの”“パチンコの打ち方だって、釘の位置も難しいんだぜ。先生は知らないだろうね”などと小馬鹿にしたり、慰め教えたりするやり方を通して、外界や対象への不満やイラダチを面接内で解消する傾向が見えだした。すると面接場面には、ストーリーをもった「ヤクザ遊び (124)」が登場した。

#### ●ヤクザ遊び

ヤクザ遊びのストーリーは、{警察に(麻薬保持で)捕まった子分が、親分に頼まれた事を警察で喋って、親分が取り調べられる。親分は「知らない」としらを切り、揚げ句の果てに密告した子分を殺し屋に殺させる内容}である。これはTVの西部警察の一場面のようなだった。

遊びのやり方は、「お前の部下が吐いているのにどうなんだ」と警察が親分を詰問する場面や親分が「知らねえ」と反論したり、殺し屋に「殺せ」と命令を下す科白が用意され、それを筆者が何度も語り演じさせられるものだった。一例を上げると、“先生、ヤクザの親分ってさ失敗すると何というんだっけ。やろうよ。やろうよ。……乾親分サツですが、子分やったと言っています”

〈それは知らねえ〉や、“だんだん親分ヤクザっぽくなってきたね。ヤク買ってこいと言ったりするんでしょう、言ったりするんでしょう”〈Sさんもだんだんヤクザっぽくなってきたよ〉。“そうかね。それに失敗するとどうなるの”〈殺せと言うんだね〉と演じきると満足そうに何度も繰り返した。

これを筆者は、「もの流し」支配から「人」をコントロールする対象関係への変化と評価し、しつこく繰り返される辟易する交流に辛うじてついて行くことになった。当初、この「遊び」に筆者が遊び過ぎて「ヤクザ」を演じ過ぎてしまうと、まるで「ヤクザの親分」そのものが居るかのように首を竦めたり、横を向いて怖がるそぶりが見え、〈怖かったね〉と宥めることも何回かあった。しかし、何十回と繰り返す内に、“怖くないよ。先生とヤクザ違う”“ねーどう言うの、やってよ”とねだったりして来るのだった。また、時折筆者が〈どうなるのかなー〉と惚けると、“それはね、殺せというんだよ!”と、まったく分からないんだからという調子で、“僕が教えてやらなくちゃ”と舌打ちせんばかりの表情を作ったりしていた。

#### 第4期 自律への試み 10年#226-325 (32歳-41歳)

##### (1) 人をコントロールする対象関係の深まり

やくざ遊びでの人をコントロールする対象関係への変

化は、次第に4期の自律への試みに進んでいった。それは特に、砂利運搬遊びから砂利運搬船“管理事務所遊び”と変化する事で、もっと深化したように感じられた。つまり、筆者との間で自由な役割を取りながら即座に答えたり、戸惑いながらも我慢して応じるなどロールプレイのように方向付けられていった。

図7が、砂利運搬船“管理事務所遊び”である。管理事務所に砂利運搬船が1年間の月毎に何回出動したかを電話で問うものだった。S自身は回数を調べることに趣味を抱く人物という設定だった。具体的な遊びは、砂利運搬船管理事務所との電話のやり取りが中心である。Sが管理事務所に自ら電話し、砂利運搬船の回数を尋ねる設定。事務所職員の筆者が以下の役割を演じ分けてSに提示するものである。〈はい。わかりました1月は〇〇回です〉と優しく丁寧に応じる場合や、〈一体何のために、どんな目的ですか、それを知って何に利用するのか〉と詰問調でしつこく理由を聞く場合。時には〈この忙しいのに電話なんかして何考えている?〉と苛々して電話を切る場合などの事務員を演じわけて提示するのである。それに対して、Sは口ごもり、対応に困りながらも辛抱強く、しかも苛立たずに応じることができた。もちろん遊び初めの数年間は、筆者の電話による問いかけ

に立ち往生して固まったり、別な話に代えたりしていた。次第に固まってはいるが、中断せず筆者の支援“どう言うの?”を待っているとか、電話口で言い訳をしたり、すみませんとあっさりと電話を切るなどで応じられるようになっていった。

## (2) 相手への優位と自己愛的な全能感覚へ

この遊びを通してSは次第に、相手への優位と自己愛的な全能感覚へ進んでゆくように感じられた。そして、しっこいやり取りに疲れ果てる筆者を“一つ一つを知るには勉強が大切、分かるかい先生”と慰めと皮肉を込めて一言ボロリと「遊びの合間に」語ることがあった。

それらをまとめて見ると、“へー、50歳でもパチンコで替えたこと(換金)もないのー”“僕が教えてやんなくちゃ駄目なんだ”“人間にはね先生、お砂糖とお塩があるんだ。甘くちゃ駄目だ”“この(焼き物の)糸尻がむずかしんだぜ、出来るかい”“BA(ボーイング)、TR(トライスター)も知らないだろうね先生には。すこしは勉強しなよ”など横柄な言い方も出てくるようになり、次第に“俺は今まで出来なかったが、今はできる。11歳の時には人が怖かったんだ”“物知りになったと思うかい”“僕は忙しい”“一人で生きてゆくこと考えたことあるかい”とか“お母さんが居なくても入院出来た。先生いなくても大丈夫さ”と自分なりに出来ると胸を張るようになってきた。

もちろん、この状態はこちらに依存しながら、小馬鹿にし威張り、揶揄し虚仮にしたりする2~4歳の自己愛的な全能感覚をともなった自律と分離の葛藤に似ているようだった。

やがて、“俺って思い遣りがなかった”“病気だった”“精神異常だったから皆に思い遣りがなかった。先生のビッコの真似までした”とわずかに情緒を込めた内面的な話や以下の昔の出来事をふっと口にすることも多くなってきた。“僕は8歳の時には、時計が読めなかった。馬鹿だったんだ”“7歳は一日中唾を吐いていた。白墨も食べて悪さをした”“先生、人はこんな風に1つ1つ聞いたり話したりするんだね”そして、さらに砂利運搬船管理事務所遊びや、その他の当てっこ遊びの中で、怒りや苛立ちを身体感覚やコトバを通して表現するようにもなってきた。

冷たくあしらわれる経験には、感情表現を“氷くらいに冷たくひやひやしておなか痛い感じ”怒りをあらわにして苛立った経験では、“風呂に入れないくらい熱くぶたれた感じだよ”つっけんどんに怒りをあらわにする

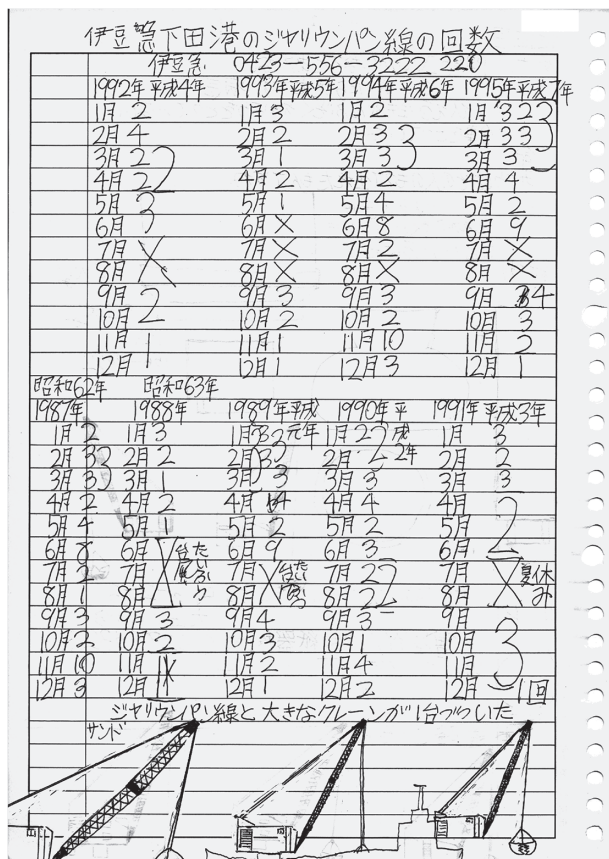


図7 砂利運搬船あそび



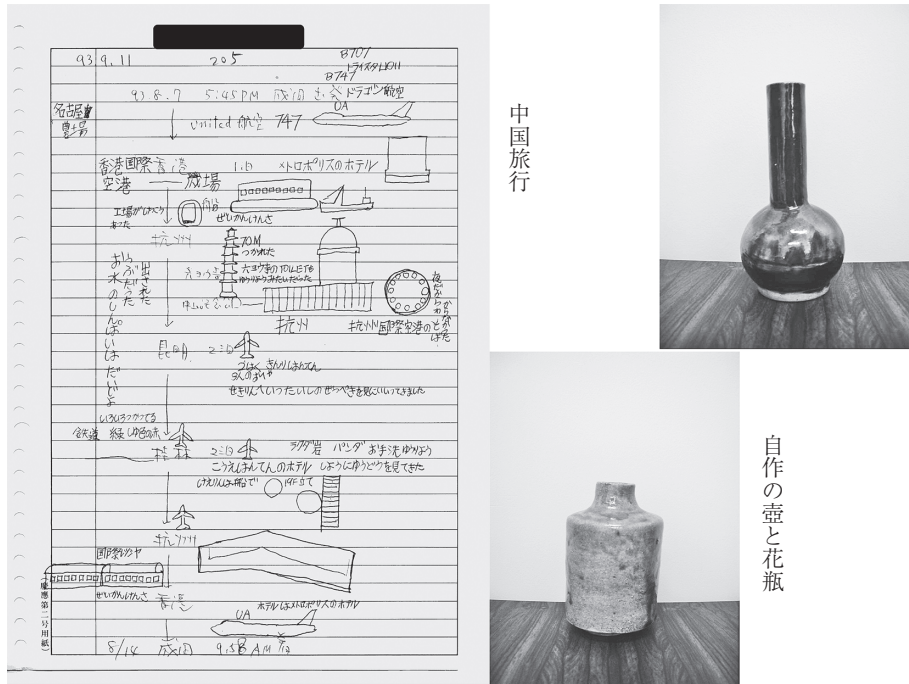


図 8

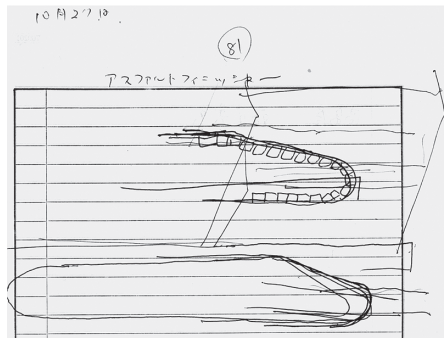
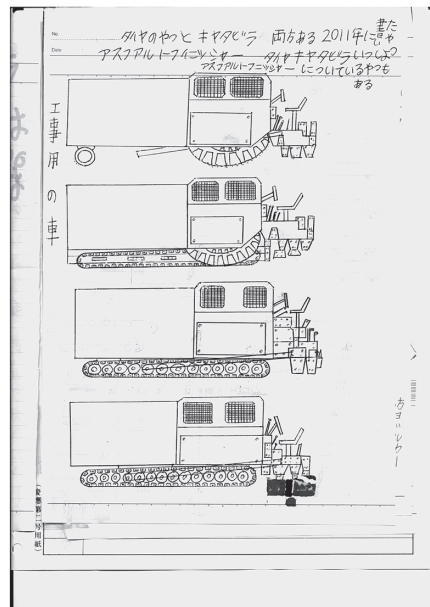


図9 アスファルトフィニッシャー (11歳)



(39歳)

人物に対しても、“俺だって頭にくる。馬鹿じゃないから感じる。そんな人もいるんだぜ先生。わかるかい。馬鹿だけじゃやってられないよ。”

そして、砂利運搬船管理事務所のデータを見ながら、“苛々するときにこれ（データ）を見ると安心するんですよ。僕は”と呟くのだった。

一方、筆者については、“先生は何でも教えてくれる。僕を明るくしてくれるからいいよ”“肩こっているだろう。こんなに背中丸くなっている……”と座っている筆者の肩に手を置いた。またある時は、“先生僕の言うこ

とわかりますか”〈わかるよ〉と応えると“そうなんだよ。先生にはな！”と親しみを込めて頷くこともあった。筆者を外界対処の道具として使ったり、また依存し感謝する対象と見做すなど、2歳から4歳ぐらいの自律した対象関係が強く認められるようになってきたように感じた。

そして外界現実では、次第に他者への関心を深めたり、日常生活の観察力も精緻になっていった。たとえば、図8のように、初めて日記風に時間・空間過程を連続して中国旅行を再現したり、自作の陶器も形が安定し

てきた。図9のアスファルトフィニッシャーなども昔(11歳児)に比べ、強迫的ではあるが格段にしっかり書かれ、大変観察力も精緻になってきた。

## 第5期 自律から“自立へ”7年#325~393

### (41歳-49歳)

次第に外界が、手に負えず不気味な怯え一杯の世界ではなく、時に不安・恐怖だが何とか関われる対象と認知しはじめ、対象関係は安定し、日常生活も滞りなく送られるようになった。もちろん時折の、不安や不満の表出は日常的に見られており、特に怒りの表出は、限定された人たち(母親と一部の高校の養護教諭、筆者)にのみ語られ処理されていた。

ところが、41歳時に初めて外界対象(会社の同僚)に向けて激しい情動的な怒りの表出が示されることがあった。30年ぶりの緊急電話が母親から筆者の自宅にあった。「家でここ3日ぐらい夜になると、“会社で馬鹿にした年下の奴を青酸カリでぶっ殺してやる!”と大声あげ、壁を蹴り、畳を叩いて数日騒いでいる。その時は目が据わって怖い感じ。でも、以前のようにずーっと続くのではなく1-2時間ぐらいで収まる。後は普段通り風呂に入り寝ている。食事普通だし出勤も変わっていない。会社でよっぽどひどいことを言われているのか、でも他人様に怪我でもさせたらいけないと!」と緊急で切羽詰まっの連絡だった。

翌週の面接日にこの課題は取り上げたことは言うまでもない。Sは定刻に入室した。いつものように家から書いてきた絵を持参した。その後細かく絵の説明に時間を要し30分ほど過ぎた。自宅での件はまったく口にしなかった。そこで筆者から、母親からの電話の件を伝えた。〈お母さんから先週家で、Sさんが夜大声で殺してやると、壁を蹴り、畳を叩いている。とてもお母さんは怖かったと電話で聞きました。〉〈先生はお母さんのお話を聞いて、Sさんが腹を立てていると思いました。会社や家でとても腹立つことがSさんにはあったのだと思いました。Sさんにとって、横に出来ない腹たちだったので、イライラして、食べたくないとか、じっとしていられなくなって、その人に毒でも入れてやりたいとか、殺したい気持ちにもなったと思います。Sさんは、お腹の中が煮え立ち、心臓がどきどきしてくる。また手にも汗が出たり、すーと顔が冷たくなったりしたのではないかと思います〉とSに理解できるようゆっくりと丁寧に説明した。Sは船クレーンや起重機を書きながら聞いていたが、唐突に“先生にもあるの”と問いかけた。〈もちろ

ん先生にもあるよ。時々嫌なことを言われたり、やろうとしていた事を先回りされてイライラすることあるよ。〉〈腹が煮え繰り返って、毒でも飲ませたいと思っちゃうことも先生にもあるよ〉と伝えた。すると、急に、“親切にしてくれる社員さんから注意を受けたこと、母から叱られた話”などをくどくどと挙げ出した。さらに加えて、幼児期の頃に“おばあちゃんにメメメ”と叱られた話を強調して感情をこめて繰り返し話し出した。

だが、終了時間近くには落ち着き出し今度は、驚くことに、“親切な社員さんは僕ができないから言ってくれた”とか、“お母さんもそうだから言うのかなー”と振り返り帰宅した。母の連絡では、ニコニコ帰宅し、“いぬい先生も腹立つことあるんだって!”と語り、その後は何事もなく勤務しているとのことであった。

### ●41歳から現在(49歳)までの経過

その後、41歳から現在まで8年間の経過では、この大騒動の感情処理が自分で出来ず無力で駄目な自分や、周囲から常に生活を支えられていることへの微(かす)かな自覚とでも取れるような心的状況が生まれてきた。また、28年間勤務した工場が閉鎖され、退職勧告を受け、4カ月後に解雇される事になるが、その退職についても大パニックにならずに、コトバや象徴的な対応をするなど自立的な営みに進みだしているかに見えた。もちろんこの理解も彼の言動から以下に例示するように、筆者が読み取り感じていることに過ぎないものである。

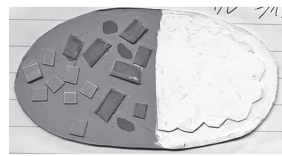
### ●無力な自分や周囲の支えを微(かす)かに自覚。

無力な自分や周囲の支えを微(かす)かに自覚してきたと筆者には思える出来事が認められた。大騒動以来“自分で自分で”と家事、洗濯・掃除を、積極的に母親を手伝い自分でもやろうとするとか、“知らないことが一杯だ、勉強しないと馬鹿になるよ先生”と努力しようと意欲を示す。”弟はお父さんになって偉い。お母さんは何でもできる”とはじめて他者を褒める。また、お父さんに初めて昼食を作り食べさせるとか、甥と姪に自発的に正月の小遣いを包む。母の誕生日にケーキを購入するなど、他者のために自発的な行動をするなどが認められた。

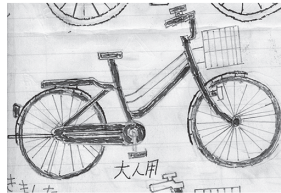
また、会社のリーマンショックでの不景気(45歳)を、Sは微妙に感じている様子で、“僕が勝手なこと。わがまま。パニック。付きまとい。などをするとみんなに見捨てられる”

(48歳383回)と不安を口にしたり、“自分の好きなことばかりではダメなんだ。ブルドーザー・船クレーンばかりでは駄目だ”のコトバが、たびたび認められるよ

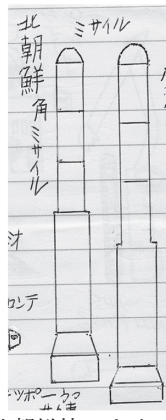
路線図



カレーライス



自転車



北朝鮮ミサイル  
(テポドン)

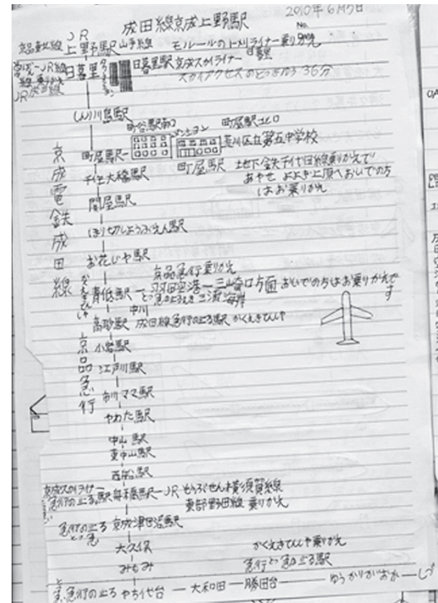


図10 作品群

うになった。その一方、親切な社員に感謝する話もあり、“僕はもっと勉強しなくては駄目だ”と、時間の読み取りや家から面接場所までにかかる時間を算出したり、それを分や秒に変換する事や買い物計算の問題を出すように筆者に願ってきている。

また、最近の時事を取り入れたり、新しいことにも図10の作品テポドン、地図、お料理、自転車を自宅で絵に描いて持参するなど積極的に取り組もうとしている。

#### ●退職をめぐって

ついに4カ月間の一時自宅待機後、2010年8月（48歳）盆の仕事納め後に工場閉鎖が決まった。一部従業員を残して全員解雇となった。Sも28年間の会社勤務の退職が決定した。

以前のような大パニックや大騒ぎ・泣き叫びはまったくなかった。しかし、最近（49歳）までは10カ月間にわたって、何度も何度も“会社にもっと居たかったな。悔しいな”“Sさんだけ見事に来ないでいいと言われた”“見事に詰まらないよ。どうしてくれんだよ”とか。388回に、歯の痛さを盛んに話すので、筆者が〈会社辞めてこころも痛いね。だから歯も痛むのだろうね〉と心の痛みや解雇の腹立ちを共有しようとコトバがけをすると、“仕方ないだよ先生。世の中はどこも全部不景気。仕方ない”と筆者を慰めるようにゆっくりと語り、“立ち行かないんだ。儲からないってこと。会社が縮小ということだよ”と呟きながら筆者に聞かせるように語った。こちらも正直身につまされてコトバが出ないこともあった。すると、さらに諦めるように、“近く

の〇〇工場も△高校もダイエーも僕と同じ日に辞めるんだ”“榎本さん、フジモリさん家も皆死んで空き家になった。住む人もいない”と静かに嘆くのがあった。“悔しいな、嫌になるな。どうしてくれるんだ”と再び繰り返し呟くのであった。

退職の辛さや排除される憤りを「歯の痛さ」や「コトバによる残念で悔しい気持ち」を何度も何度も繰り返すことで、喪の仕事（モーニングワーク）を続けているように筆者は感じていた。

そして、その後10カ月後に、地域受産施設の下請けの仕事が見つかり入職した。“仕事出来てホッとしているよ。やっぱり家にいるよりいいんだ。”“前の会社とシステムが違うんだ。先生リズムが大切なんだ！リズムは会社の事情なんだ。ルールだよ”“それ知らないとトンチンカンになっちゃうんだ”と嬉しそうに述べた。筆者から〈昔はリズムはなかったの？〉に答えて、Sは“そう you are nonsense だったよ”“僕は自分のことしか考えていなかったから。おかしかったんだよ。それを守らないと駄目だ”“もう一度生きたいな”等を口にした。

そしてその中から、なんと、“前の会社の近くにゆくと唾が飲み込めなくなる。治そうと思っているんだ”と呟いた。彼の4～5歳のころの症状行動の唾へのこだわりを口にしたのである。そして、“こだわりだ。僕の良くないところ。訓練しないと駄目だ”と最近の面接では語っている。



#### IV. S.F さんから学んだこと

以上の38年間の面接経過から、S.F さんから自閉症の治療理論や技法の若干の理解を教えていただいたが、それらに増してS.F さんには、心理臨床の本質を教えられることが多かったと思う。その幾つかを皆さんと共有して、本講演のまとめとしたい。

- ① 彼は40年前、われわれ専門家からは認知、発達障害と見立てられた、いわゆる「問題児」であった。しかしその後25年後の面接で、その頃を”僕は変なことばかりしていたの。だからお母さんに叱られたの”と振り返ってしみじみ語るのだった。このことは、問題児だった当時も、われわれ専門家には見えなかったが、その問題児の彼を見つめている（健常な）S.F さんが確かにいたことを物語っていると思われる。この経験は、たとえわれわれにとって外から理解しにくく、了解しにくい問題を抱えたクライアントと心理面接する場合でも、そのクライアントの中に存在する健常な彼自身に語りかけることの必要性を教えてくれていると考えられる。
- ② 25年～30年前の当時の自閉症の治療や理解を勧めていた指導的な医師や心理臨床家の一部は、自閉症に力動的な心理療法は適用でないと諸外国の文献を掲げて心理療法から撤退した。しかし、じっくりした心理療法を40年間持つと、なんと当時の問題児はS.F さんのように会社員として社会的にも活動し、”先生も年なんだから無理しないでね”と思ひ遣りある一言を語る人になったのである。自ら地道な面接を継続せず、諸外国の臨床実践の受け売りや流行に走ってはいけないとの警鐘をS.F さんの心理面接は教えていると思う。
- ③ 経済効率を面接に持ち込めば最も非効率なS.F さんとの治療過程である。しかし、SF さんを通して、非効率な心理面接の中にある出会いと変化の凄さをつくづく教えられた。事例経過の中でも述べたが、永年寄り添い、関わる事から、38年前の「唾を飲み込めない」＝外界が飲み込めないS.F さんの引きこもりカプセル化した怯えた世界の一部を知ること

ができたと筆者には感じられた。彼も以前に比べ楽に日常を過ごすようになっていくのに見える。もちろん、物事が見えてくると現実の苦しさや苛立ち等の耐えがたさにも直面するものである。S.F さんにとってもこれから苦しみや数多く出会うであろう。これからも彼の苦しみや楽しみに寄り添ってゆくことができればと願っている。

さて、この寄り添い、関わるこの手法は心理臨床家にとって馴染みの対応である。しかし、効率・成果を重視する昨今の経済原則が先行する心理臨床事情からは、真っ先にS.F さんは切り捨てられるクライアントの一人であろう。果たして、心理臨床はそれでよいのだろうか。

心理臨床の原点は、クライアントの声なき声を聴き、時に代弁して、現実の痛みを消化できるように考え共に生きる専門家集団である。しかし、いつの間にか共に悩み苦しむというより、学ばせ・躰け・指導する単純化した役割だけになっていないだろうかと思うのである。改めて、単純化できない心の奥深さへの敬意をS.F さんから学ぶことになったと思う。

- ④ ある時、面接時間を間違えた筆者を、S.F さんは“先生が間違えるはずはないよ。僕が間違えた”と他のカウンセラーに語ったと聞いた。その時、心理面接はクライアントが作るのだとつくづく感じた。私たちカウンセラーにとって、彼は何人かの相談対象の一人であるが、彼にとっては筆者が唯一のカウンセラーであることを教えられたのであった。

#### V. 終わりに

もちろんここに挙げた事柄以外にも、数多くのことをS.F さんから教わっている。このように、一人のクライアントさんからわれわれ心理臨床家は、多くの豊かな知識と技量と智慧を得ているのである。「事例研究から学ぶ」という心理臨床の原点を教えて頂いたS.F さんに改めて深く感謝して本講演を閉じることにしたい。

#### 参考文献

- 乾 吉佑 (2009). 思春期・青年期の精神分析的アプローチ  
遠見書房